アイルハルト・フォン・オーベルク

『トリストラントとイザルデ』（2）

小澤昭夫訳

4　モーロルトとの戦い（続き）

トリストラントがモーロルトと戦い、後者は死に前者は毒槍に傷つくこと[1]

さてトリストラントは、このようにマルケ王の手によって立派に武装を整えて貰い、島へ赴こうとした。そのとき、マルケ王は彼を胸に抱き寄せ、口づけして言った。

「神さまが慈悲深くそなたをお守りし、無事に送り返してくださるように。そして、そなたは敵を打ち倒すがよい」

居合わせた者たちは皆、主なる神がトリストラントの味方をしてくださるようにと祈った。

トリストラントは舟に向かった。彼は馬の手綱を引き、楯と剣を手に取った。こうして彼は島へと進んでいった。そこには、諸君がもうお聞きのように、モーロルトがすでに到着していて、砂浜で彼を待ち受けていた。勇敢な戦士トリストラントは、自分の舟を岸にしっかり繋ぎ止めると、槍の柄でもってモーロルトの舟を海に押し出した。

すると、すぐにこの恐ろしい男が言った。

「なぜ、そんなことをしたのだ、お若い方」

トリストラントは答えた。

「その訳をお聞かせしよう。われわれ二人が来たのは、ここで死ぬか名誉を得るためです。勝利に恵まれた勇士がここから戻るには、舟は一艘で足りるのです」(820-853) [2]

この言葉を聞いて、モーロルトはトリストラントに好感を覚えた。モーロルトは彼に言った。

「私と一緒に私の国に来たまえ。心からお願いする。私の全財産と封土を君と分かち合おうではないか。君が考え直して戦いを止めるなら、私は君のためにいつでも生命と財産を差し出そう。君の生命のことを考えたまえ。それが道理というもの。私が君を打ち殺したなら、私は一生悔やむことになろう、美しく立派な若者よ。よく考えて、私への敵意を捨てたまえ。そうしたら、私も確かにそれに報いよう。君を豊かにしてやるし、私の領地の半分を与えよう。君を死なせたくない。勿体ないではないか。だから戦うことなど止めるがよい」

するとトリストラントはきっぱりと言った。

「喜んでそうしましょう。あなたがマルケ王に貢納を免ずるならば」

「それは出来ぬ相談だ」モーロルトが答えた。

「マルケ王の貢納を免除するつもりはない。それは度が過ぎた要求というもの。そのことを聞いた者は皆、私が恐怖心のためにそうしたと思うだろう。そんな要求には応じられない。もし応じたなら、私は、わが主君のすべての国から追放されるだろう」

---

[1] 原文は „Tryȳstrand mit Morholden vacht. ÿener starb, der kam in unmacht“。直訳では「前者は気を失う」となるが、この決闘においてトリストラントが「気を失う」場面はないので、むしろ後続の内容に即して敢えて表記のようにした。

[2] G の作では、トリスタンは自分が乗ってきた小舟を乗り捨てて、海に漂うままにする（6792）。ここでのトリストラントは、モーロルトの舟をしかも槍の柄で押し出すのであり、挑発的な態度は際立っている。

「ならば、すぐに挑戦するまでです」トリストラントが応じた。
「私が今申し出たこと、それを君に望んだことが悔やまれる。死んだ方がまだましなくらいだ」
二人にはもうためらいはなかった。双方とも戦闘意欲に溢れていた。彼らは馬にまたがると、槍を脇の下に構え、突きを入れるために穂先を下げた。こうして戦闘態勢が整うや、豪胆な二人は、一騎打ちへと乗馬を走らせた。
槍は互いに相手の楯を突き破ったが、彼らが握り締めていた柄は折れてしまった。
この衝突の際に、トリストラントは鎧越しに傷を負い、このために彼は長く患うこととなった。(854-913)
戦士二人が勇み立ってぶつかり合った後には、もはや休戦の余地はなかった。このときトリストラントは、毒を塗った槍で傷を負っていたが、これが彼をひどく苦しめることになるのであった。
おのおのの槍が折れたとみるや、トリストラントは勇ましいモーロルトを馬から突き落とした。こうして彼はモーロルトに傷のお返しをしたのである。
モーロルトがすぐに起きあがると、トリストラントもまた馬から飛び降りた。二人は駆け寄ると、剣を激しく打ち合って、互いに相手に深い傷を負わせた。二人とも己の勇敢さを示そうとしたのであった。
これは後にも先にも、二人の男によって行われた最も激しい決闘になった。戦いは激烈であった。剣の打撃によって兜から赤い火花が飛び散るのが見えた。
こうして勇士トリストラントは、求められた貢ぎ物を雄々しく戦って支払ったのであるが、モーロルトもまた怒り狂ったイノシシのように応戦したのであった。
トリストラントは、剣を巧みに使えることを示し、モーロルトの楯は切り付けられてぼろぼろにされた。しかしトリストラントの楯もまた同じ目にあったのである。(914-944)
幾度も二人は剣を打ち合い、その音が大きく響いた。モーロルトがトリストラントに激しい一撃を加えると、若者は十分には持ち堪えられなかった。それでも彼は強者モーロルトの腕に同じような一撃を返し、剣を持つ手を切り落とした。手と剣を失ったモーロルトは、これ以上トリストラントと戦うわけにもいかず、敗北を悟ると逃げ出した。
トリストラントはモーロルトを追いかけた。この意気盛んな人は、その力強い手で剣を振り、鋼の兜に切り込んでモーロルトに深く大きな傷を負わせた。モーロルトはトリストラントの足下に倒れ、こうして戦いは終わった。
だがまたこのように言わねばならない。トリストラントにとって不幸なことに、その傷の中には、剣の刃から毀れた欠片が残っていたのだと。
トリストラントは勝ち誇って叫んだ。
「あなたはこれで貢ぎ物を十分に受け取られた。あなたの見せつけた傲慢さが、あなたの命取りになったのです。申しあげますが、あなたはわが主君の貢納を免除せねばなりません。それがあなたの意に反していようとも」
戦いが終わるとすぐに、トリストラントは歓声で迎えられた。(945-979)
モーロルトの家来たちも長く待つことはなかった。もし彼らがモーロルトをそこに横たわったままにしておいたなら、それは恥ずべき行いであったろう。泣きながら彼らは勇士の遺体を運んだが、ひどく悲しんで言うのであった。「ああ、何という恥と不名誉を被ったことか」と。彼らはそこからすぐに国へと戻って行った。
それに先立って、一人の使者がアイルランドの王女のもとに送られていた。もし伯父上にまだ息のあるうちにお会いになりたければ、出来るだけ早くお出迎えください。ぐずぐずしていてはなりませんと。

この王女はイザルデという名であった。彼女は高貴な乙女であり、広く国中に知られていた。彼女はまたその国の他の誰よりも医術の心得があった。[3]

彼女はその知らせを聞くと痛く悲しんで、伯父モーロルトを出迎えるために海に出て行った。(980-1004)

彼女は、伯父がまだ生きてさえいれば、命の危険を取り除き治してあげられる、と確信していた。しかし、彼女が来たとき、彼はすでに死んでいた。ただちに彼女は白い手で彼の傷をつぶさに調べ、鋼の破片を見つけた。それはトリストラントの剣のこぼれ刃であった。彼女は泣きながらそれをしげしげと見た。この優れた姫は、この破片を大事に取っておいた。こうして彼らは皆、本国へ帰って行った。

彼らの悲しみは大きかった。モーロルトの遺体は彼の身分に相応しく厳かに埋葬された。イザルデは激しく泣いたが、多くの高貴な婦人や一族郎党、埋葬に参列した人は皆泣いたのである。

アイルランド王は、墓の上に身を投げ出し、涙を流して嘆いた。「私が生きている限り、そなたを失った痛手から立ち直ることはできまい」

これは家来衆にとっても、辛く悲しい出来事であった。王は彼ら皆に命じた。戦士たるもの、コーンウォールの国からこの国にやって来る者は誰であれ命を奪うよう努めよと。(1005-1037)

王はまた、コーンウォールから来た者を捕らえたなら、その場で縛り首にするか、裁判などせずに打ち殺すようにと命じた。こうして多くの人が、何の罪科もなしに殺害されたのであった。

コーンウォールの国では、このことを知った人たちが、それもみなトリストラントの所為だと言いふらしていた。

私が実際に聞いたところによると、コーンウォールからアイルランドへは、船でしか行けなかったので、王は、船でアイルランドに来た者は皆、躊躇なく殺害させていたのであった。こうして王は、勇敢なモーロルトを失ったという激しい怒りのために、数多くの女を絶望の淵に沈めた訳である。

そのモーロルトといえば、トリストラントに回復し難い深手を負わせて仕返しをしていたのであった。彼を治療できる医者は一人もいなかったので、彼の傷は一向に癒えなかった。この世のなかで、ただひとりイザルデだけが、その気になりさえすれば、毒に冒された傷を治すことが出来るのであった。

しかしイザルデにとっては、トリストラントが死んでいたならば、はるかに好ましいことであったろう。なにしろ、トリストラントが彼女をひどく苦しめたのである。彼女は、この苦しみを決して克服できないと思った。というのも、この世で彼女の一番好きだった人を、トリストラントが殺してしまったからだった。その人こそ勇敢なモーロルトだったのだ。(1038-1076)

トリストラントは、イザルデの伯父から命と名誉の両方を奪ったことよって、彼女が彼に対して敵意を抱くという事態を招いたのであった。

アイルランドの王は、この乙女の父親であった。彼女に匹敵する婦人は、どこの国を探してもいなかった。彼女の名は遠くまで知られていて、また大いに賞賛されていた。優れた御婦人たちが話題になるところでは、彼女が賞賛を独り占めであった。彼女は美しくて聡明で、礼節をよくわきまえていた。彼女は善行を積み、名誉を得ようといつも心がけていた。その上、彼女は宮廷にふさわしく朗らかであった。彼女のもとには、国中から救いを求めて人が訪れた。彼女が、この国で最良

[3] G では、医術の心得があるのは、イゾルデはイゾルデでも、モーロルトの妹でアイルランド王妃である同名の母親の方である。

の医師とみなされていたからである。彼女の手当によって、数多の重病人が癒されたが、それは彼女の知識のお陰であった。(1077-1101)

5　トリストラントのアイルランドへの治療の旅

トリストラントが毒に冒され、イザルデが回復させること

トリストラントの病状は重く、食べることも飲むこともできなかった。ついには毒に冒された傷口から、耐え難い悪臭が立ち始め、もはや誰も彼に近寄れなかった。

そこでトリストラントは、クルネヴァルをマルケ王のもとに遣わし、王に頼みごとをした。どうか彼のために、町外れの海辺に粗末な小屋を作るよう命じてくださいと。

このまま町の中で人々のそばに留まっていても、回復はとても望めないと思うほど、彼は苦しんでいたのであった。

クルネヴァルが王にトリストラントの願いを伝えると、王はすぐに願い通りの場所に小屋を建てさせた。そこへ病人トリストラントは運ばれて行ったが、大声であれひっそりとであれ、人々の嘆きの声に見送られてのことであった。

トリストラントが町の中からその小屋へと運ばれたとき、人々の目は涙で曇った。多くの人が彼に付き従って行ったが、彼らは皆、常に騎士の模範を示そうと努めていた英雄を失ったことを嘆き悲しんだ。

彼の傷は強烈な悪臭を放ったので、人は皆トリストラントに近づくのを避けた。王と内膳頭ティナスを除いては。二人の他には、この病人のお世話をした三人目がいて、それがクルネヴァルであった。(1102-1140)

トリストラントはいつ命を落としても不思議はない、とみなされていた。男も女も皆それを心から悲しんでいた。

その頃、トリストラントは考えていた。「海に出て行こう。二度と陸地に辿り着かなくても構うものか」と。そこで彼は、小舟に乗せてくれるよう頼んだ。その小舟で独りで死を迎えるつもりであった。人々を悪臭で悩ませるよりは、むしろ海の上で独りぼっちで死んで行こう。彼はそう決めたのである。[4]

別れ際に、彼は従者のクルネヴァルに言った。

「一年の間、私の大切な王様のもとで待っていてくれ。王様が、君の暮らしが立つようにして下さる。生き長らえたならば、一年以内に戻ってくる。私を信じてくれ。しかし、私が死んだなら、君の得になることをしてくれ。つまりこうだ。君の領地に戻り、私の父に言うのだ。君に十分に報酬を与え、私にすべきように君を血族として遇し、父の死後には君に王冠を戴かせるようにと。解ってくれよ。こんなことは、君以外の誰にも認めはしないのだから」(1141-1176)

しかし、クルネヴァルは王冠のことも領国のことも考えはしなかった。彼はただ激しく泣くばかりであった。居合わせた人々は、富める者も貧しい者も、トリストラントの不幸を哀れと思わずにはいられなかった。

彼らがトリストラントを海辺へと運んだとき、悲嘆の声が湧き起こった。聞いたところによると、トリストラント殿は、小舟には彼のために竪琴と剣を載せてくれと頼んだのである。その願いは叶えられ、小舟はついに海

[4] Gとは異なり、行き当たりばったりの死出の旅である。Gでは、トリスタンが目指すのは、アイルランドの首都ダブリンである。というのも、決闘の最中に相手のモーロルトの口から、トリスタンが負った傷は、毒塗りの剣による致命的なもので、これを救えるのは彼の妹でアイルランド王妃のイゾルデだけだ、と聞いていたからである。

に押し出された。

マルケ王にとって、彼の愛する甥が一人寂しく岸辺から沖へと流されて行くのを見るほど辛いことはなかった。王の悲しみは尋常ではなかった。

私の話を信じて貰いたいが、王は涙を流しながら、荒波が甥を乗せた小舟を遠く沖へと押し流してゆくのを見守っていたのでした。

トリストラントを酷く苦しめたのは風であった。風が彼をあちらへまたこちらへと揺さぶるのであった。こうしてこの哀れな病人は、舵もなく運まかせで漂わねばならなかった。小舟が何処へ向かおうとも、彼にはもうどうでもよかった。[5]

そうこうするうちに大風が小舟を捉え、アイルランドの方へ押し流し、砂浜に放り上げたのである。そこは国王の城の前であり、自分が何処にいるのか分かったとき、トリストラントには死が確実であると思われた。(1177-1211)

さて、お聞きください。彼がどのようにして生き長らえたのか。私が本で読んだ通りのお話です。

浜辺に打ち上げられた小舟に気づいた王は、そこへ使者を遣わした。その小舟には何があるのかを知るためであった。使者は、傷ついて死にそうな人が小舟の中に横たわっているのを見ると、すぐに宮廷に駆け戻った。使者は急いで王に伝えた。小舟には病人が一人横たわっていて、その人は、不幸にも脇腹にむごい傷を負っていると。王は、直ちに自ら海岸へと出向き、陽射しを遮らないようにして、病人にその名を問うた。この質問は、トリストラントには厄介で危険であるように思われた。彼は死を恐れたからである。そこで彼は王にこう答えた。

「私はプロ[6]と申します。イングランドに家があります。私は商売のために船出しました。けれども海の真ん中で不運に見舞われました。私は以前は楽士でもあり、多くの財産を持っていました。今は神の思し召しに従うのみです。嵐が私をここへ運んで来ました。私は海上で富を奪われ、致命的な傷を負っています」(1212-1242)

王は、彼の病状がただ事ではないのを知ると、彼を懇ろに世話するよう家臣に命じた。更に王は、宮廷にいる娘のもとへ急ぎ使者を走らせた。彼女に病人の医者の役目をさせ、幾種類もの軟膏を塗布した絆創膏を作らせるためであった。さもなければ、病人の命は尽きたであろう。こうして病人は軟膏と絆創膏を与えられたが、最初はあまり効き目がなかった。

そこで純真な姫は、彼にもう一度良い軟膏を届けさせた。それを彼は、痛みを和らげるために、傷の周りに塗ることができた。七夜が過ぎると、また別の軟膏が彼に届けられた。

しかし、姫に告げられたのは、その軟膏が彼に苦痛を与えるばかりで、一向に効き目がない、ということであった。姫は、よくよく考えた末に、こう言った。「その病人は、毒に冒されているのだ」そこで美しいイザルデは、毒に対して有効な軟膏をすぐに彼に送った。そのお陰で、彼は速やかに回復したのであった。

そのような救いの手を姫が差し延べたので、彼はどうにか窮地を脱することができたのである。しかし、その間もずっと、彼は姫に会うことはなかった。その全てが、使者を介して行われたからである。(1243-1273)

この若者が健康体に戻ったとき、アイルランドの国じゅうに大飢饉が起こった。それは、敢えてその国へ赴こうとしない勇士たちの所

---

[5] 「こうしてこの哀れな病人は」以下 4 行は、D 写本の 1152-1155 による。

[6] 主人公がプロと名乗るのは、本作と散文民衆本だけである。G では、このときタントリス Tantris (Tristan のアナグラム）と名乗るが、本作でタントリスが登場するのは、これよりしばらく後のアイルランドへの二度目の旅においてである。

為であった。[7] そのため王は領主たちを宮廷に召集して、この大飢饉の苦境を脱するために何をすべきか助言を求めた。王は言った。「この国ではすでに多くの人が命を落としている。どんな対策を採るべきか、皆で私に助言してくれ」

けれども、領主たちの中の誰一人、これに応ずることができなかった。「どうして黙っているのだ」と王は言った。そこで思い立つと王はトリストラント[8]に使いを遣って呼び寄せた。

彼が王の前に現れると、王は彼にも助言を求めた。トリストラントはすぐに答えた。「王様、あなたが私にお示し下さった御厚意には、神さまが天国の王冠で報いてくださるに違いありません。私の提案をお望みでしたら、飢饉を終わらせるために力添えいたします。つまりこうです。大型船をイングランドに派遣し、そこで食糧を買い付けるのです。そこへは私が道案内をいたします。そして、食糧買い入れの交渉を、力の及ぶ限りお手伝いいたします」

これを聞くと、王は家臣に向かって言った。「この提案は気に入った。海の向こうのあの国へプロに行って貰おう。われわれに食糧を届けて貰うためだ。必要な資金を彼に委ねよう」家臣も皆、この解決策を賞賛した。(1274-1313)

王は、飢餓を恐れていたので、この方策が彼ら皆に受け入れられたのが解ると、必要なだけ多くの船を用意するよう命じ、食糧調達の為にトリストラントをイングランドへと遣わした。こうして英雄は、王の宮廷に別れを告げた。彼は剣と竪琴を手にすると、急ぎ船へと赴き、王の委任を受けてイングランドへ向け出帆した。

トリストラントはイングランドに来ると、一人の経験豊富な商人を雇い入れて、彼のために食糧を調達して貰った。その全てが巧妙に行われたので、取引成功の知らせを聞くと、皆が思い込んだ。彼が優れた商人で、これもひとえに彼の才覚によるものだと。こうして皆が喜び、苦しみから解放されたのであった。トリストラントは、船に食糧を積み込ませた。彼は、皆のために優に 1,000 マルク[9]の取引を成立させたのであった。

彼らはトリストラントに心から感謝し、故郷へと戻っていったが、彼を岸辺に置き去りにしたのであった。しかし、これは彼が自ら望んだことであった。

その訳をよくお聞きくださいよ。彼は、船乗りを通じて、マルケ王の国から来た船があることを知り、その船に乗せて貰ったのである。こうして彼は、帰りたいと願っていたその国へと帰っていった。そこで彼は大歓迎を受けたのであった。(1314-1353)

彼がティンタヨールの海岸に上陸したのは、その地を離れてから丁度一年後の同じ日であった。今や彼は苦しみから癒され、すっかり健康を取り戻し、上機嫌であった。船からただ一人の旅客が降りてきたとき、それを見たクルネヴァルはすぐにそれがトリストラントだと判った。

クルネヴァルは喜んだかどうか、とお尋ねですか。もちろんですとも。そのこともお伝えしましょう。クルネヴァルはトリストラントとの再会を心底よろこび、嬉しさのあまり泣いたのです。

誠実なクルネヴァルは、彼の主人が戻ってきたことで、これまでのすべての苦しみを忘れ去った。私が読んだものによると、直ちに使者が王のもとへ走り、トリストラントが戻ってきたことを報告した。吉報をもたらし

[7] アイルランド王は、モーロルトが殺害されたことへの恨みから、コーンウォールからの渡航者には死をもって報いていたので、コーンウォールからの食糧供給の道もまた絶たれていた。

[8] 王は、この時点ではトリストラントをプロとして知るのみである。

[9] 1マルクは、銀または金の半ポンド（500g）

た使者に、王は、死ぬまで裕福に暮らせる報酬を与えたのである。それから王は、多くの家来を従えて堂々とトリストラントを迎えに行き、歓迎の辞を述べた。一行は皆、トリストラントがこのように回復して無事に帰還したことを神に感謝した。忠実なティナスは、トリストラントを懇ろに迎えたし、かつてトリストラントと知り合いだった者たちは男も女も皆、彼が帰ってきたことを喜んだ。(1354-1388)

やがてトリストラントは、騎士としての徳を示すことによって名望のある男になっていた。彼は、馬上槍試合でも戦闘においても常に有能さを示したので、国中で賞賛され、コーンウォールの国で最も優れた騎士と呼ばれたのであった。

マルケ王はトリストラントを大層愛していたので、彼のために妻を持つことを望まなかった。王は考えたのである。この勇者を我が息子にして、自分の国を統治させようと。しかし、それは彼の血縁の者すべてをひどく蔑ろにすることであった。彼らは王に熱心に頼んだ。彼に相応しい女性を妃とするようにと。それでも王は、結婚するつもりはないときっぱりと言うのであった。そのためにトリストラントは、罪なくして憎まれたのである。しかも、その憎しみは、彼の耳に入るようにあからさまに語られもしたのである。トリスタンの全く与り知らぬことであったにも拘わらず、多くの人が、王の行為は彼の勧めによるものと邪推したのであった。(1389-1417)

6　トリストラントのアイルランドへの求婚の旅

燕のエピソード

ある時、マルケ王の親族と家臣が王の前に進み出た。彼らはトリストラントも伴っていた。彼らは王に、その身に相応しい女性を妻とするようにと頼んだ。それは彼ら皆の一致した願いであった。しかし、王は彼らに暫しの猶予期間を求めた。その時になれば、自分の意向を伝えると。このことを王がためらいもせずはっきりと言ったので、彼らには好ましく思われた。何しろ王は、以前はしばしば結婚しないと断言していたのであった。

さて、王が自らの決意を明らかにすべき日が来たとき、王はただ一人広間に座っていた。王は、結婚は決してしないと命にかけて誓った手前、彼らの要求を断念させるにはどのようにうまく説得したらよいのか思い悩んでいた。

折も折、窓から広間に飛び込んできた二羽の燕が、嘴でつつきあいの喧嘩を始めたのであった。それに気づいた王は、一心に見守っていた。すると燕が髪の毛を一本落としたのである。よく聞いてくださいよ。これは真の話ですぞ。(1418-1449)

その髪の毛は長く、美しかった。王は、近くでもっとよく見てみようと思った。それは或る女性の髪の毛であった。[10]

王は独りつぶやいた。

「これでもって我が身を守ってみよう。この女性を妻にしたいと望むのだ。この女性を探すことなど家来たちにはできまい。彼らの

[10] G は、Exkurs（余論）(8601-8628）の中でこの燕のエピソードに触れている。「トリスタンの物語で、一羽のつばめがコーンウォールからアイルランドへやって来て（どうしてつばめがそこにあることを知ったのかわからないが）一筋の女の髪の毛を巣作りの材料として手に入れ、それをもって再び海を渡って帰ったと物語っている人もいる」(8601-8607）（石川訳）石川によれば、「燕が持って来た髪の毛の持ち主を探すというのはもともと童話のモチーフ」とのことである。

要求から我が身を守るのに、これ以上よいものはない。彼らは甥を憎んでいるが、それというのも彼が有能だからだ。私は確信している。彼は誠実で賢明だから、彼らが彼に仕えることになろうとも、我が身の損になることはあり得ないと」

そのとき家来とトリストラントが揃って広間に入ってきた。彼らは王に声高に頼んだ。国の体面に関わるこの件をどうなさるつもりかお聞かせくださいと。

王は答えた。

「或る御婦人の髪の毛が、ここにある。諸君にはっきりと言っておこう。それが叶うならば、その御婦人を妻に迎えたい。私の決めたことを聞いてくれ。その人が私の妃にならぬなら、この世に私が妻としたい女性は誰もいない。むしろ、永遠に地獄に住む方がましだ。このことをしっかりと覚えておくがよい」(1450-1481)

王のこの言葉は、家来たちには不愉快であった。そこで彼らは尋ねた。その御婦人とは誰なのかと。すると名高い王は、彼にも判らないと答えた。しかし、彼らは「王は、我々の要求から言葉巧みに逃れるつもりなのだ」と思い、ひそひそと話し合うのであった。これはすべてトリストラントただ一人の所為だ。そもそも彼は王を愛してなどいない。王の名誉と富が増すことを願わないのは彼の大きな罪だと。

それでも彼らは、その髪の毛が一体どこから来たのか、もっとよく知りたがった。王は語った。それは広間の床から拾い上げたもので、二羽の燕が嘴でつつき合いの喧嘩をしていたときに落ちてきたのだと。それを聞くと家来衆は、その婦人を捜し出すのは土台無理な話だと言い合った。それでも王は頑なに言い張った。彼のために彼女を連れて来ないのなら、妻帯せずに一生を終えるつもりだと。(1482-1505)

すると勇敢なトリストラントがこの言い争いに割って入った。

「王様、なぜそんな振る舞いをなさるのですか。あなたがお妃を持とうとなさらぬことが私は心配です。そのために私は危うい立場になっています。と申しますのも、あなたの親戚の方々は、この全てが私の助言に従って行われている、と主張なさるからです。ですから私は、私がそのような助言などしなかったことを証明するつもりです。あなたが話題になさった女性が本当にお気に召されたならば、それが婦人であれ乙女であれ、私が連れて参ります。私のために船を一艘用意して、旅に必要なものを積み込ませてください。あなたのために、幸運だろうと不幸に見舞われようと、どこまででもその人を探しに行きます。神さまがお望みになるなら、どこかでその人を見つけられるかも知れません。その髪の毛を私にお預け下さい。その人を探し当てた時に、当人と判るように。どうか信じてください。私にはあなたの名誉が何よりも大事ですし、このことでこれまでの御恩に報いたいのです」

「神がそなたに報いてくださるように」と王は言って、彼のために頑丈な船と旅に必要なものを用意せよと命じた。王は、トリストラントが望むものを喜んで提供した。

内膳頭ティナスは、騎士100人分の甲冑を船に運び込むよう命じた。船内には、金貨や食糧、衣服もたっぷり積み込まれた。こうしてトリストラントは、王の家臣の100人の騎士とともに、その地を離れていった。(1506-1547）[11]

[11] マルケ王の独り言から明らかなように、燕がくわえてきた髪の毛の話は、結婚しないための口実に過ぎない。トリストラントの一行は、誰の髪の毛かも分からぬままに、当てずっぽうに探しに行く訳である。このことについて、物語の合理性を重んずるGは、前述のExkursの中で次のように評している。「そうだ、もしこんなふうにして使いが出されたとすれば、使いを出した王も、このような助言をした顧問官たちも、使いになった者も、一人残らず間抜けのとんまといってよかろう」(8624-8628)（石川訳）

マルケ王のもとを離れたトリストラントの身に起こったこと

愚にも付かぬ話のために、トリストラントが大変な骨折りを引き受けたのは、未熟さの故であった。さて、船出した一行は、海上を一ヶ月も旅をした。その間、空と海の波の他には何一つ見ることはなかった。彼ら一行は、騎士の行動意欲に駆られて、大きな危険に身をさらしていたのであった。トリストラントは船長に命じた。死にたくなければ、アイルランドには近づかないようにと。彼は言った。「もし我々が船でそこに着くと、命を奪われると聞いている。我々は、あらゆる国を巡って、一人の婦人を探さねばならない。この船で行けるだけ彼方へ、馬で進めるだけ遠くまで。そしてその御婦人を見つけるその日を迎えるまでだ」(1548-1570)

その頃、恐ろしい大嵐が始まった。嵐は猛烈な力で船を翻弄し、船はその夜のうちに選りに選ってアイルランドの地に打ち上げられた。しかもそこは王城の前で、かつてトリストラントが病を癒して貰ったまさにその浜辺であった。これは本当に危険な旅であった。

トリストラントは辺りを確かめると、旅の仲間に言った。

「ここで私は病を治して貰った。以前は、私にとって嬉しい結果になったが、今度は、その分だけ我々が苦しい目に遭うのではないかと心配だ。あれがアイルランド王の城であるのは間違いない。今は慎重に行動する必要がある。ここから無事に逃れるには、大いに知恵を絞らねばならない。そこで、私の願いどおりに行動して貰いたい。皆は口を開くことなく、私ひとりに話をさせてくれ。われわれ皆を守るために、知恵の限りを尽すつもりだ」(1571-1595)

どこかの船が王城のすぐ近くに乗り上げたとの知らせを受けると、王は激怒した。王は主馬頭に命じた。こんなことは許さぬ、罰として船乗りたちの首を刎ねよと。

主馬頭は、それが気に入ろうと気に入るまいと、敢えて拒みはしなかった。彼は船に赴くと、船上の人たちに悲しげに告げた。

「皆さん、船から下りてください。私はあなた方の命を奪うよう命じられました」

「それはあなたに似つかわしくありません」トリスタンは言って、彼に今すぐに金製の杯を進呈すると申し出た。それは、この地に流れ着いた事情と彼らの願いを、使者として王に伝えて貰い、彼ら一行を暫くは生かしておいて貰うためであった。そのために、トリストラントは主馬頭に金の杯を贈ろうとしたのである。主馬頭は立派な人だったので、トリストラントが願ったことを確約した。トリストラントは金杯を持ってこさせ、主馬頭はそれを受け取った。それによって主馬頭は、礼節をわきまえた騎士であることを示したのであった。(1596-1621)

こうしてトリストラントは語った。

「王様にはこのようにお伝え下さい。私たち、私と私の縁者十二人は、皆裕福な商人ですが、イングランドから船出して、この国にやってきました。この王国で大飢饉が起こったという噂を聞いたからです。直ちに私たちは、十二隻の船に食糧を積み込みました。積荷を大事に守ってお国に運んで来ました。というのも、私たちはこの積荷に財産のすべてを投じたからです。利益のみならず名誉も得たいと考えました。ところが、途中で、この国から逃げ出し追われている人たちと出会いました。その内の一人が言ったのです。この国にやって来る者は誰であれ殺されると。

私と仲間は、我が身に降りかかった大きな不幸を嘆いておりました。皆一緒にここへ来るべきではなかったので、相談の結果、籤引きで決めることになりました。今となれば、私の大いに悔やむところですが。籤に当たった者だけがその船を進めて、果たしてこの地で商売ができるかどうか、敢えて調べてみることになった訳です。使者の役目はこの私に

当たりました。他の仲間は、まだあの沖に留まっています。どうか高貴な王様に、私どもの命を奪わないようにお願いしてください。そうしてくだされば、運んできた食糧を残らず王様に速やかに引き渡します。王様には、私の名前もお伝え下さい。私はタントリス[12]と申します」(1622-1664)

これを聞いて、主馬頭は、事情はすべてその通りなのであろうと確信した。彼は、この商人が語ったことを、王に上申した。そのお陰で､彼らはひとまず死を免れたのであった。

しかし、他国者たちは、一日中不安を抱えながら、王城の前に滞在していた。彼らは互いに語り合った。

「生き長らえたとしても、囚われの身でいつまでもこのアイルランドにいなくてはならないのだ」

[12] Buschinger 版では Kantriß（1664 行）だが、ここでは Lichtenstein 版テキストの Tantris（1585 行）に従っている。

するとそこに一人の男が通りかかった。男は、この国を荒廃させた竜のことをトリストラントに語った｡そしてこう教えたのである。神の御加護によってこの竜を退治した者は、王様の覚えがめでたくなって、王様の娘を妻として与えられること請け合いだと。

これによって明らかになったのは、トリストラントが真に勇敢な戦士だということであった。彼は、それならば命を賭けようと思ったのである。一つには、その美しい娘のためであり、二つには、王の怒りを静めて、仲間たちの命を救うためであった。トリストラントには、このように座して死を待つよりも、むしろ竜と戦って死ぬ方が良いと思われた。(1665-1697)

（つづく）

テキストと参考文献

『トリストラントとイザルデ』(1)（『八戸学院大学紀要』第 57 号掲載）の末尾参照

執筆者紹介（所属）
小澤昭夫　八戸学院大学　健康医療学部　人間健康学科　教授

『トリストラントとイザルデ』(1) の正誤表

頁、行	誤	正
83、注 6）、4～5	ここに至るまでのあらすじは以下である。	ここに至るまでのあらすじは以下の通りである。
87 左、1	モーロルトが要求を伝えてきたとき	モーロルトが貢ぎ物を求めてきたとき
87 右、1～2	大胆不敵であり	身の程知らずであり
87、注 13)、2	写本 H の	写本 D の